

# サミュエル・ジョンソンの思想： その分析と再構成

——学問について (2)——<sup>1)</sup>

石 井 善 洋

(受付 1999年5月18日)

## 6. 短 い 一 生

前編では、人間的な事象に偶然が関与するというジョンソンの思想的な立場から、運命論的な才能観を否定し、才能は目的追求の過程で結果的に獲得される適性であり、努力と勤勉こそ目的を達成する主要因であること、したがって才能を獲得し、真の自己を築く確実な手段は、努力と勤勉に求められるべきであるという、ジョンソンの学問観の輪郭を描いてきたが、ここではそれを精神の特性と時間の認識、および運動の効能という視点から描き、さらにそこから帰結する総合的な問題に目をむけて、ジョンソン文学のテーマの一端を浮き彫りにしてみたい。才能を生来の固定的な能力と信じるのが迷妄であり、それを破ることからジョンソンの考察がはじまったように、これからの考察でもある根深い迷妄を破ることがジョンソンの最初の課題となる。それは、人生の儚さを知識として知りながら、心底で

---

1) 小論は「サミュエル・ジョンソンの思想：その分析と再構成——学問について——」(広島修大論修第39巻 第2号 人文編 1999年3月 別冊 広島修道大学人文学会)の後編である。

テキストは *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson* を用い、*The Rambler* を R、*The Idler* を I、*The Adventure* を A と略記する。文中に (R. 43. 2, III. 232) のようにあるのは、*The Rambler*, No. 43, paragraph. 2; *Yale Edition*, Vol. III, p. 232 の意味である。また James Boswell 著、*Life of Johnson* は、Oxford UP の *The World's Classics* 版を用い、*Life* と記す。その他の出典についてはそのつど文中に明示する。

はいつまでも生きていられるように感じる心の迷いのことである。「人生が不安定で儂いことを目にも見、口にもするくせに、まるでいつまでも終わらないように活動し」(R. 71. 12, IV. 11), 自分だけは死なないと信じている心の盲目と驕りのことである。「人生は短い」という真理を本当に真理として実感するのが、命を終えんとする間際である (R. 71. 2, IV. 8) ことが、学問の成就を妨げる決して小さくない原因なのである。

ジョンソンは、人間が自由に使える時間がどれほど限られているか、きわめて現実的に認識している。われわれの時間の多くは、つまらぬ気遣いや、日々の仕事の繰り返しのために失われている。快適で幸せな暮らしのために苦勞して得たものは、大抵その日のうちに費やされ、翌日はまた同じことを繰り返さなければならない。その上、睡眠時間、自然の要求にとられる時間、習慣的に奪われる時間、人生の飾りつけに必要な時間、社交に要する時間、病気のために奪われたり、無気力に呆然とすごしたりする時間などを差し引くと、本当に自分のものと呼べて、有意義なことに使える時間はわずかしかなかった (R. 108. 2, IV. 210)。このような認識から、ジョンソンは仕事や義務に対してつぎのような切迫した自戒をいだいている。

最高に長生きする人でも人生は短い<sup>すがた</sup>のだから、無駄にできる時間などないことは、だれでも知っていることかもしれない。一生の義務の量は人生の長さに比例しているから、日々果たすべき仕事があって、それを怠れば翌日の義務は二倍にふえる。しかし、すでに数年、数ヶ月と、こつこつ努めるべき時間を無為に送ってきた人は、もともと少ない時間のもはや一部しか残されていないことを知るべきである。あと残されている数時間、数分は、神がたくした最後の時間で、一瞬たりとも無駄にはできない、と。(R. 71. 14, IV. 11)

刹那主義的な人間なら、このような人生の相<sup>すがた</sup>から、今をつかめ、目前の喜びをにがすな、人生は短く、未来は思いどおりにならないのだから、という思想を得るかもしれない。しかし、ジョンソンの場合はまさに逆で、人生が短くて不確かだからこそ、はたすべき志望をもつ人は、今をよりよく

生きるべきであると教える。その意味を、つぎの三つの例から考えてみる。

バクスターは、学校を建てるためにとっておいた千ポンドをなくしたとき、再三嘆いたものである。神がその力を与えてくれているうちに、慈善を行うべきだったのに、善行を偶然の手にゆだねて、実行を急がなかったばかりに、せっかくの期を逸したのは、ある程度自分に非がある、と。(R. 71. 8, IV. 10)

悔悟を遅らせるのは愚の骨頂である、と牧師らは口をきわめて言う。永遠の生を偶然の手にゆだねるのは、たしかに愚かである。今の関心を先送りするのは、その怠慢の重大さに比例して同じ過ちとなる。それは、早目にきちんと処理しておけば避けられる、突発的な無用な危険に自分をさらすことであり、意味もなく警戒してくよくよ悩むことである。一度逃した機会は、二度と返らないかもしれないのに、当てのない機会に空しく備えることである。(R. 71. 13, IV. 11)

徳よりも楽しみを後回しにする方が安全である。一時間の浮かれ騒ぎよりも、善を行う機会を逸する方が、損失は大きい。(R. 71. 7, IV. 9)

以上の引用から、今という時間を大切にすることは、ジョンソンにとって多分に倫理的な行為であることが分かる。引用の趣旨を学問に当てはめて言えば、研究の完成は、初志をとげるという意味で、個人的な価値であり善であるばかりではない。多くの人の利益がかかわっている場合は、社会的な意味においても価値であり善である。善は偶然に完成するわけではない。今、現在、このときを大切にせよ、勤勉につとめよというのは、その善の実現を偶然の手にゆだねずに、自分の意志の力で確実に果たせという教示なのである。

ジョンソンの著作には、勤勉の徳を称揚する文章は枚挙にいとまがないと言ってよい。しかし、彼の教訓はそれだけではない。いかに勤勉に励んでいても、学問の道のりは無限とってよいのであるから、人生の儚さを意識しなければ、仕事は未完に終わる。あるオックスフォードの碩学は、文

献学の学生に人生が短いことを忘れてはいけないと諭していた、とジョンソンは言う。さもないければ、資料収集に熱心なあまり、すでに手一杯なのに、さらに集めに集めて、一生かけても整理しきれないほど集めて、結局仕事は未完に終わるからである (R. 71. 9, IV. 10)。「思いつくかぎり必要なものが整わないうち実行はできないというのであれば、人生はできない企ての準備で、無為に過ぎて終わる」(R. 71. 5, IV. 9)とジョンソンは戒める。

ジョンソンは、人生の短さに思いを致さなければ、結局、勤勉な人も無精な人も、「最後の死の呼び声に、同じように慌てふためく」(R. 71. 10, IV. 10)と諭している。彼の比喩をかりると、もしも藪の中で撃たれる鳥と、大空へ飛ぼうとしたときに撃たれる鳥が、生の価値において大差がないといえるならば、大空へ羽ばたこうとした鳥の労は無意味にひとしい。つまり、一生を一つの価値として見るとき、仕事が未完で終わった人の生は、何もしなかった人の生と、価値においては同じかもしれない、というのである。だから、学問に志す人は、とにかく仕事を完成させるべきである。そのためには、熱狂や気紛れなどを排し、仕事の大きさと自分の能力を冷静に判断して、仕事の量をバランスよく配分することが大切である (R. 207. 14, IV. 314)。学問も、学問に志す人も、まず価値を生まなければならない、という強い思想がジョンソンにはある。

## 7. 精神の特性と時間の認識

ジョンソンのようにさめた目で計算すれば、人生には有意義な目的に使える時間はわずかしかないのかもしれない。しかし、彼は決して悲観しているわけではない。それどころか、ボズウェルは、世を憐んで人生の悦びに関心を失うことは、「理性の敗北であり、精神の病である」(Life, 847)、とジョンソンから学んだと言っている。ジョンソンによれば、人間に与えられている時間は多くなくても、勤勉な人には充分である。彼が信じるには、「大仕事を成し遂げるのに足りないのは、時間ではなく、不断の努力」であり、「注意すべきは、なけなしの不十分な時間だと嘆いている間にも、われ

われがその多くを浪費している」(R. 108. 3, IV. 211) ことだからである。

ジョンソンは勤勉の徳を称揚するものであるが、しかし、もし彼の教えが、一方で、「一生は短いから時間を大切に励め」ということであり、他方で、「足りないのは時間ではなく、不断の努力である」ということならば、彼の教えは一見整合性を欠いているように思われるかもしれない。しかし、これは決して論理的な矛盾ではなく、同じ精神の二つの様態に即した忠告ととらえるべきである。その背景を理解するためには、ジョンソンが人間の精神の働きをどのように理解し、時間の意味をどのように認識しているかを調べてみる必要がある。ジョンソンはこのように言っている。

[ジョン・] ロックが言うように、学問の<sup>ようてい</sup>要諦は、一度に少しだけ進むことである。精神の大飛翔は小飛翔を何度も繰り返しているうちに起こる。学問のもっとも広大な大建造物は、一つ一つの仕事の絶え間ない積み重ねでできているのである。(R. 137. 5, IV. 361)

この引用から分かることは、ジョンソンが考えている学問の要諦は、厳密にあって、膨大な時間を費やすことと同じなのではなく、時間の効果的な使用のことをいっている、ということである。時間を効果的に使って、少しずつ持続的に休まずに進むのが、ジョンソンが考えている勤勉の意味なのである。持続的な小さな前進が、学問という大建造物の礎石となり、それを積み上げていく過程での連続的な精神の小飛翔が、やがて大飛翔をはたすことを可能にする。一連の仕事の中で精神が真に創造的にはばたく時間は長くないかもしれない。しかし、その飛翔のためには、少しずつ持続的に進むという助走が必要なのである。彼がいう「不断の努力」とは、集中的な切れ目のない努力をいうのではなく、このような地道な行為を総体的に表わした言葉と解釈することができる。

また、時間に関して言うと、彼の著作には二つの見方が混在しているように思われる。一つは、「あと残されている数時間、数分は、神がたくした最後の時間で、一瞬たりとも無駄にはできない」と、人生の儚さから時間

の価値を拡大してとらえようとする、いわば微視的な視点といえる見方であり、もう一つは、時間の意味を人間の一生から俯瞰してとらえようとする、いわば巨視的な視点といえる見方である。ジョンソンは「砂が山を、一瞬が一年をつくる」のだから、細部を重視することは大切であると考えているが、対象を正しく評価するためには、全体を一つのまとまりとして考えなければならない、とも考えている (*Life*, 847-8)。存在を一つの大きなまとまりとして考えることによって、生の各部分の意味づけが可能となり (*R.* 155. 13, *V.* 65)、人間ははじめて自分の生を正しく評価することができるようになる (*Life*, 847-7)。微視的な視点と巨視的な視点という二つの見方は、一見まったく逆の視点ではあるが、結果的には一つの思想に融合するはずである。重要なことは、前者が時間の価値を絶対化して、人生を内側から衝迫する力となっているのに対して、後者は時間の意味を相対化して、人生をゆるやかに受容する力となっていることである。前者の視点は、人生の儚さを意識した気質的な衝動に由来するが、後者の視点は、その衝動を超克する時間の理性的な意味づけである。ジョンソンの場合、人生の儚さからくる衝迫は、それを相対化して人生をゆるやかに受容する理性的な視線の中に包摂され、生産的な認識に高められている。一生は短いから時間を大切にして励めという教訓と、足りないのは時間ではなく、不断の努力であるという教訓は、このような内面的な衝迫と理性的な認識の二つの表現なのである。

以上のような思想を、彼の著作から具体的な忠告として拾おうとすると、つぎのようになる。たとえば、大きな計画を立てている人は、今までの生活を変え、仕事をなげうって、趣味や娯楽をすて、日夜根をつめて励まなければならない、と考えがちであるが、ジョンソンの考えにしたがえば、それは賢明なやり方ではない。それよりも現在の生活をつづけながら、仕事の合間を学習にあてて、休まずに努力をつづける方が理にかなっている。いきなり思い立ってがむしゃらに奮起しても、困難にあえばすぐに挫けてしまうし、そのような奮起は何度繰り返しても、気紛れに目標を変えていく

だけなので、大事業の成就には至らない (R. 108. 7, IV. 212)。何よりも人間の精神の特性を無視した無謀な試みである。反対に、大きな計画を暇なときや落ち着いてやれるときに先送りするのも、人間の能力の適性を見誤った行為である。並外れた知性の持ち主ならば、通常のプロセスをふまえずに、いきなり結論まで飛躍して、まさしく暇なときに仕事を完成させるかもしれない。が、そんな例外的な人間をのぞけば、もっとも優秀な学者でも、小さな飛翔を繰り返して——飛翔と飛翔の間、精神は休んでいるかもしれないが——知識を進歩させる。一つ一つの進歩は、短い時間で充分である。必要なことは、人生の短さを意識しながら、時間をむだにしないことなのである (R. 108. 8, IV. 212-3)。ジョンソンはこのような持続的、総合的な努力を、勤勉と呼んでいる。

さらに敷衍すれば、学問の進歩に貢献した人の中に、日々の労働や貧困など、外的な障害を克服して名を残した人が少なくないのは、以上のような精神の働きを理解し、時間を賢明に活用していたからだと言えるかもしれない。ジョンソンによれば、生活上の外的な事情で研究から注意がそれでも、絶えず関心をもちつづけていれば、より強い探求心をもって学問に帰ることができる。彼の比喩を借りると、水が流れてさえいれば、「水路がせばまっても、かえって流れが勢いを得るように、……短時間で力を発揮しなければならない必要性から、ときに自分の能力が強化されていることに気づくかもしれない」 (R. 108. 9, IV. 213)。大きな仕事をなした作家の多くは、自由な時間がふんだんにあったからではなく、限られた時間をうまく利用して、より強い意欲をもって著作にあたっていたのかもしれないのである。時間は限られているが、一つ一つの機会を大切に、一生という視野に立って仕事を行う。これがジョンソンの教える勤勉の意味である。時間に関する教訓をほかにも引いてみよう。

あるイタリアの哲人は、「時間はわが畑なり」を座右の銘にしていたというが、たしかに時間は畑と同じで、耕さなければ何も産出しない。だが、勤勉な労働には必ず十二分に報い、どんな欲張りな願いでも叶

えてくれる。手をぬいて、遊ばせて、雑草が生えるにまかせ、使うよりも見せびらかすために土地を寝かせておきさえしなければ。(R. 108. 11, IV. 214)

遠い先のあやふやな約束を励みとして困難と闘うことができた人は、今まさに結果をえようとしているときに、力をゆるめてはならない。あと一息というところで、気をぬいたり、手をぬいたりするのは、嵐の中で船を舵とり、陸が見えたら風に任せてしまうようなものである。土を掘り起こし、種をまいて、最後の収穫を怠るようなものである。(R. 207. 11, V. 313)

ただ危険なのは、大多数の人がそういう傾向にあるが、世間にちやほやされたいと望むことである。また、気力がなくなったときに、昨日の勤勉が今日の怠惰をつぐない、一度博した称賛が惰性的にいつまでもつづく、夢みることである。(R. 207. 15, V. 315)

## 8. 運動と精神の活動

ここで運動と精神の働きについて考えてみたい。運動が精神の働きに与える影響については、ジョンソンが描いている無為の分析から知ることができる。ここでいう運動 (motion) とは、文脈から読むかぎり、身体もしくは精神への働きかけ、ないしは刺激を意味する言葉<sup>1)</sup>と解釈することができる。ジョンソンによれば、人間にゆるされている時間は限られているが、勤勉な人には充分である。前編で見たように、十分な時間がある人に、ジョンソンは逆に特有な知的陥穽があることを指摘している。強度の集中力は短時間しかつづかない。書齋にこもって深遠な問題に心を沈めようとしても、学問の困難、もしくは倦怠の前に、意識はしらずしらずのうちに楽しい方へ流され、やがて取り留めもない考えに耽るようになる。そのうちに「習慣的な<sup>まどろ</sup>微睡眠」(R. 89. 5, IV. 107)に領され、知力は阿片に侵されたよ

1) ジョンソンの『英語辞典』には 'agitation', 'thought impressed' という定義がある。



うに鈍って、荒唐無稽なことを考えるようになる危険がある。ジョンソンはそのような心理を「この見えざる心の暴動」、「存在のこのひそかな放縦」(R. 89. 4, IV. 106)と呼んだが、彼がこのような知的墮落をとくに警戒するのは、それが生の意味をうばう可能性がある、と考えているからである。ジョンソンは、呆然と座って動かない習慣からは、せいぜい安楽しか望めない、と言い、安楽を苦痛と楽しさの中間の状態であるとして、その暗い力の帰するところをつぎのように叙している。

安楽が得られれば、多くの人はそれで満足するであろうが、しかしこの世のものは常ではない。安楽は楽しさへ発展しなければ、苦痛の方へ沈んでいく。……運動で刺激をうけなかった生命力は、しだいに鈍くさびれ (languid) ていく。力がさびれると、障り (obstructions) が生まれ、障りから苦が生まれて、われわれの心身はその周期的な責め苦にゆっくりすり減っていく。苦はときに人生を長く感じさせ、人生を無用なものとし、われわれを悲惨の臥所<sup>ふしど</sup>につなぎとめ、あざけり、死を願わさせる。(R. 85. 5, IV. 83)

ジョンソンの内面的な世界では、運動の欠如は精神活動の停滞に直結している。しかもそれはいわく言いがたい暗い状態であり、ほぼ死を意味すると言っても過言ではない。この一節についても言えるが、彼の著作に散見する記述を見ると、ジョンソンは人間の精神活動にある種の力学的な法則を認めているような印象をうける。それは、図式的に整理すると、「動」と「静」の関係である。「動」は運動によって生命力が燃焼している活動状態のことで、「静」は運動の欠如による無活動の状態を意味する。運動はそれ自体を維持できないので、外からの供給がないかぎり、自然に消失していき、それにともなって、「動」は水の低きにつくように「静」へ移行し、しかもいったん「静」に陥ると、その状態が惰性的につづく。このような運動の自然消失と、「動」から「静」への変転の法則を、ジョンソンは人間の精神の働きに認めているように思われるのである。そして何よりも目を引かれるのは、彼がその過程を、「さびれ」「障り」「苦」「死」などの言葉で、

「痛み」としてとらえていることである。また、興味深いのは、「動」と「静」の関係を、労働と無為、勤勉と怠惰という関係に置き換えて、倫理的な意味づけを暗示していることである。

怠惰への転落は穏やかで感知しがたい。なぜならばそれはたんなる活動の停止にすぎないからである。しかし勤勉へもどるのは困難である。なぜならそれは停止から運動への、欠如から実現への変化を含意するからである。(R. 156. 12, V. 64)

前編で見たように、ジョンソンは「無知とはたんなる欠如のことで、そこからは何も生まれない。それは魅惑するものがなくて、魂がよどんで動かなくなった虚無の状態のことだ」(*Rasselas*, chap. XI, XVI. 49) と言い、無知の原因を「心の墮落」(*Life*, 324) に求めていた。もしこれを精神の力学的な法則から見るとすれば、「魅惑するもの」は外からの刺激であり、働きかけであり、運動である。また、「魂がよどんで動かなくなった虚無の状態」は運動が欠如した状態であり、「心の墮落」は「停止から運動へ」「欠如から実現へ」精神を刺激して始動させようとしないう、無為と怠惰を意味する言葉であると解することができる。

ボズウェルは、ジョンソンの生涯を総括すると、彼が他の思想家にまさっていた点は、「考える技術、精神を用いる技術」(*Life*, 1400) にすぐれていたことである、と記しているが、実際、ジョンソンは、「心の管理は偉大な技術である」(*Life*, 690) と言い、日常的に心を管理し、刺激していく術を探求して、友人にも忠告している。ボズウェルへ宛てた書簡から、具体的な処方例を見てみよう。

……決して読書の習慣をなくさないこと。虚無 (vacuity) を受け入れることなど決してあってはならない。無為には堪えられないという容赦のない気持をもつこと。怠惰でなく、邪心の起きない人は、有益で価値があるはずである。つねに向上し、他を益するはずである。もし何か意味のあることに従事できないときは、瑣事に忙しくせよ。心は

やがて瑣事にうみ、満足したくて、よりよいものを求めようとする。しかし、もしも心が空想にふける怠惰の阿片に自らなだめることを学んだら、もしも心がひとたび無為に満足するようなことになれば、今後の時間はすべて失われる危険がある。(Letters of Samuel Johnson, Oxford, IV, 180)

ここでは明らかに倫理的な意味づけがなされている。運動の消失と、「動」から「静」への変転が、精神の停滞の法則であるとすれば、他方、瑣事に忙しくし、よりよいものを求めて精神を刺激していくのは、自覚的に力を発動して、この停滞の法則を克服しようとする行為である。ジョンソンはそこに倫理的な意味を見ている。無為や怠惰でないことは、活動の状態であり、邪心が起きないことであり、有益で価値があることであり、他を益することである。瑣事に忙しくすることは、今を生産的に生きながら、外的な刺激の力をかりて、精神を始動させ、倫理的に正しく行動することなのである。彼が「徳」(virtue)という言葉で表わしているのは、このような行為であると言える。彼の『英語辞典』によると、'virtue'には「道徳的な善」(Moral goodness, A particular moral excellence)のほかにも、「有効性」(Efficacy), 「力」(Power), 「行動力」(Acting power) という定義が与えられているからである。

ジョンソンは、精神がその本来の仕事に倦んだとき、機械的な作業にもう少し注意をむけるようにすすめ、精神の健康と倫理的な価値の両面から手仕事の効用を称えている。手仕事は無為な時間をなくす最適な労働であり、手仕事をしているうちは心が蝕まれることがない。それは孤独な時間から自分で怠惰をなくすことを可能にし、孤独のうちにひそむ熱狂、空想、妄想、恐怖、悲嘆、願望などを未然におさえ、もっとも危険な魂の誘惑から人間を守ってくれる。ジョンソンはギリシャの古典文学にふれて、「ヘクトールは、『イーリアス』の中で、アンドロマケーが恐怖に脅えているのを見たとき、機織りをさせて自らを慰めさせたという」(R. 85. 12, IV. 86), と古人の知恵を紹介し、「徳と幸せの大半はこのような賢明な規則正しさの

うちにある」(R. 85. 11, IV. 86) と教えている。

ジョンソンの教えにしたがえば、時間を有効に使いたかったら、沈思黙考ばかりしていないで、手作業や機械的な仕事にも時間を割く方がよい。研究には孤独を要するが、孤独は自己に沈潜しすぎる人には危険なので、戯れや運動にも時間を割けばよいのだが、楽しみを楽しみで終わらせずに、少しでも利益に結びつくようにするなら、彼は会話を楽しむのがよいと教える (R. 89. 11, IV. 108)。よき友となら無駄話に花を咲かせていても、きつと何か得るもの、発見するものがある。知的労働に従事する人は、<sup>あいあい</sup> 藪々たる語らいを悦びとするのがよい、と言うのである。

## 9. 倫理としての学問

これまでの考察から、ジョンソンの学問観を総合的に描くことが可能になったように思われる。学問の<sup>よう</sup>要は、一度に少しずつ、しかし休まずに前進することであり、そのような精神の持続的な小飛翔がやがて大飛翔をはたすことを可能にする。一気に飛翔しようとする試みは、限られた人間だけに許された特権的な行為で、普通の人間の精神的な特性には反している。また学問は往々にして倦怠と無為をとともなうが、そのような精神の停滞は、日常の瑣事や機械的な作業が防止してくれる。また勤勉な人の人生に日常の瑣事をいれる余地は充分にある。つまり、健全に効率よく研究生活をつづけていくためには、学問だけではなく生活の諸事にも時間を割いた方がよく、その方が精神の特性に合った、合理的で健康的な研究生活となる。ジョンソンの考察を総合すると、このような結論があぶり出されてくる。すなわち、勤勉とは、学問に専心することだけではなく、研究活動もふくめて、生活全般に精神が主体的にかかわる行為を指す。知識の獲得という行為が孤立してあるのではなく、日常生活へのかかわりが、知識の獲得という中心にむかって有機的に結びついた生活を、ジョンソンは勤勉な生活と言っている。彼の学問観は、人間観、幸福観と同質なのである。彼はこれを正面から論じるよりは、側面から風刺的に忠告として論じる方を好むが、

その論旨から判断するかぎり、この結論はたしかだと思われる。

この思想の一端を表わす例を二つ挙げてみる。

論理的に考える人は必ず倫理的に考えなければならない。(Johnson on Shakespeare, VII. 71)

言葉の定義だけで言えば、「論理的」は「倫理的」と決して同じ意味ではない。しかし、人間の生という文脈の中では、「論理的」に考える人はきっと「倫理的」に考えるはずである、と言葉は意味合いを変えるのではあるまいか。ジョンソンの思想は、このように形式的な論理を排して、人間の方に引き寄せられている。もし学問に論理的な思考がふくまれ、学問が人間の営みを対象とするならば、その学問の根幹にはきっと倫理の問題がふくまれている。彼にとって、知的精神活動は、倫理的な思考と実践をふくまざるにはいられないのである。さらに彼はつぎの箴言を信じている。

幸福になることは賢者の務めである。(Life, 825)

もし倫理の実践が徳の完成を目的とし、徳が幸福と結びつくはずであるなら、深い知識を修め、倫理を実践している賢者が、幸福を得るのは自然であり、それを身をもって示すことは、学問と倫理の価値を顕彰するという意味で、義務である。ジョンソンの学問観が、人間観、幸福観と切り離すことができないのは、以上の例からも確認できる。

このような全人格的な、倫理的な学問観が、ジョンソンの批評活動に重要な指針を与えていることは間違いないが、ジョンソンの諷刺的なスタンスは、それが諷刺的であるがゆえに注意すべきものを含んでいる。たとえば、

学問には、たしかに有用な知識とほとんど結びつきそうにないテーマも、幸福や徳にほとんど役立ちそうにないテーマも多い。なくてもだれも困らないようなものの研究に、額に皺よせて、心配に身も細る思

いで熱中している様子を見ると、ときに揶揄、憐愍を禁じえない。(R. 83. 4, IV. 71)

と、無用な知識をもてあそぶ研究に、彼は辛辣な批判と諷刺をあげるときがある。しかし、注意すべきことは、何が人類を益する学問で、何が無用な学問なのか、神ならぬ人間には知りえないことが、彼の思想的な立場からも、彼自身の文章からも確認できることである。前編でみたように、彼は未来を予断することは、「神が人間に与えることをよろこばぬ能力を求めることだ」(Life, 368) と言い、未来の可能性については謙虚な態度をとる。また「好奇心を制限し、学問の労を目前の日常の用に役立つ技術に限定するつもりはいささかもない」(R. 180. 6, V. 183) と明言し、さらに「善意の仕事、罪のない好奇心については、やる気をそぐのは危険である」(R. 83. 4, IV. 71)、また「どんな研究であれ、自分の才能を眠らせずに、こつこつ努力をしている人には、きっと同胞のために貢献できるときがくる」(R. 83. 5, IV. 72) と、彼は善意にもとづくかぎりどんな研究でも奨励している。

では、なぜジョンソンが無益な学問を批判しているように見えるのかといえば、それは、彼が、学問そのものではなく、主として学問の無益さと有害さを印象づける学者の人間性を批判しているためである。彼の批判は、なぜ学問をする人間がよりよい人間になれないのか、という点に集約されてくる。「思索に一生を費やし、真理の発見だけに努める人が、なぜ想像の妄信を改めることができないのか。なぜ偏見や癩癩を組み伏せることができないのか」(R. 180. 9, V. 184-5)。このような批判は現代人の耳には奇異にひびくかもしれない。しかし、ジョンソンにとって、学問と人間性の乖離は当然問題にされなければならない。もし彼が信じるように、学問の意味が倫理的な人間形成にあるとすれば、それを追及する学者の人間性は、学問を修める意味、ひいては学問それ自体の意味を問うことにつながるからである。もしも人類の役に立てず、人々の幸福に貢献できず、また自らよい人間にも、幸せにもなれないとしたら、それはいったいどんな学問か、何

の価値があるのか、彼はそのように問う。

ジョンソンが批判するのは、自分が置かれている立場を悟らずに、研究のみに埋没するような生き方である。日常からかけ離れた、べつに必要なでもない主題に没頭して、答えの出ない、また出たとしてもほとんど幸福に寄与しない問題に、人生を空費するような生き方である。そうやって生きている人にも、いつかは世の中に役立つときがくるかもしれない。ジョンソンはその可能性を否定しているわけではない。しかし、未来の不確かな成功のために、今、現在の、日常的な徳をないがしろにしてよい理由はない。ところが、そのようなことに気づかないために、どうしてもよい問題に「額に皺よせて熱中している」学者は、人格の完成どころか、しばしば日常の用にたえず、ちょっとしたこともできず、社会とのつながりを保つことも、相互の愛情をかもし出すこともできない。そのため、ときには自分より劣っている人からさえ軽蔑されるのである (R. 24. 8, III. 132)、とジョンソンは言う。彼の忠告を見よう。

感嘆は、深遠な研究と驚嘆すべき発見によっても得られようが、悦びは得られない。愛情も、もっとやさしい才芸と、周囲の人にすぐに伝わるものがなければ得ることはできない。だれにも十分な知識がなくて、人類の一部しか関心をもたないような問題しか語れない人は、世間と没交渉な沈黙のうちに日々を失い、大勢の中で友なき人生を送らなければならない。重大なときにしか役立たない人間は、多くの人が苦しみ悩んでいるのに何もできずに、その能力を発揮することなく、無能な傍観者として命を終えるかもしれない。(R. 137. 11, V. 363-4)

ジョンソンは、深遠な研究にたずさわる人は、日常とのギャップをうめなければならない、と忠告する。どんな学問を修めた人でも、日々の生活に助けは必要だし、人恋しくもなる。だから、友情を築く方法はやはり知らなければならない。優しさはお互いに利益を与えあい、楽しみを分かちあうことがなければ得られない。どんな利益でも相手が受け入れてくれなければ意味がないし、どんな楽しみでも相手が楽しんでくれるものでなけれ

ば役に立たない (R. 137. 12, V. 364)。ジョンソンはこのように言う。

学問の高みから降りていっても、それで名誉が失われるわけではない。なぜなら反対にそんな人にはみな大いに感謝するからである。小さなことに用いられる大きな才能は、ロンギナスの喩えを借りれば、まるで夕暮れの太陽のようだ。輝かしい光を放ち、その大きさを保ち、より多く楽しませながら、しかも眩惑することがない。(R. 137. 13, IV. 364)

また、社会生活にかかわり、社会に役立てるという意味では、学識は、もっていることを人に知ってもらわなければ、もっていても仕方がないのである。なぜなら、せっかくの学識を秘めているだけでは、世間はそれに報いたくても報いてやることができないし、学者本人には名誉にも利益にもならない。民衆の蒙を啓き、過ちを正してやれなければ、結局、人類の役には立てない (A. 85. 8, II. 413)。だから、ひとたび学識を身につけた人は、いかにしてそれを普及させ、気持よく人々に伝えるかを考えるべきである (A. 85. 9, II. 413)。完成された人格は、公正な識見に表現力をあわせもつことが大切なのである。

どんなに学識深い、観念的な頭の持ち主でも、低俗な言葉で思想を表わしたのではどうしたって見限られてしまう。熱烈に真理を愛すると公言する人は、認めざるを得ないはずだが、真理の魅力の一部はその装飾美にある。それが野暮なだらしない衣服をまとして、みすぼらしく現われた日には、魂に訴えかける力の大半を失ってしまう。(R. 168. 2, V. 126)

ジョンソンは、著作家の完成に必要な多くの要件の中で、早く世間にでることほど重要なことはないと言う。知識の種子を植えるのは孤独の中でもできようが、耕作は広い世間でなければできない。議論は大学でも学べ、理論は隠居生活をしていても築けるかもしれないが、美しく飾る技術や、人を惹きつける力は、いろいろな人と広く会話をしてはじめて育つものだから



らである (R. 168. 9, V. 128-9)。

## 10. 真 の 知 識

学問も、学問に志す人も、何らかの形で人類の幸福に貢献しなければ、その分をつくしたことにはならない。これはジョンソンの著作のいたるところに表われているゆるぎない信念であるが、彼にはさらに大局的な視点があり、ときにそれが学問や勤勉の価値を否定しているような印象を与えるので、注意する必要がある。たとえば、つぎのような文章である。

公立図書館ほど人の望みの虚しさを思い知らせてくれる場所はない。今は目録でしか書名を見ない、苦痛きわまる瞑想と、正確な調査を記した大部の書が、ただ学問の威厳を誇示するためにのみ、壁という壁にぎっしりと並んでいるのを見ると、実を結ばぬ努力にどれだけの時間が虚しく過ぎたか、みなどれほど将来の絶賛を期待していたか、幾多の有能の士が虚名の頂点に上りつめたことか……と思わぬ人がいるであろうか。(R. 106. 3, IV. 200)

……すべての障害を乗り越えて名声への道を歩む人は、[名声は]自分の勤勉、学識、知力とは別な原因によるところが大である、と認めなければならない。(R. 2. 15, III. 14)

しかし、これまでの考察から明らかなように、ジョンソンが学問や勤勉を否定的にとらえていると考えるのは誤っている。ジョンソンは、学問は人類の幸福に貢献するし、貢献するべきであると、あくまでも主張しているのであるが、個人の業績は他人の評価をまつしかなく、その意味では相対的で、時間とともに、歴史とともに忘れ去られる運命にある、と考えているにすぎない。彼の批判は、歴史の中にしめる個人の卑小さに気づかずに、学問的な名声を熱望するあまり、一部の人間の意向を迎えたり、すべてを犠牲にして研究に埋没したり、虚偽を真実と偽ったりする、人間の愚かさや驕りにむけられている。人間としてほかにも目をむけるべき義務がある

ことに気づかせようとしているのである。これはジョンソン文学の中心的なテーマである。彼の代表的な詩、『人の望みのむなしさ』(*The Vanity of Human Wishes*, 1749)の学問に関する部分も、このような視点で読まなければならない。

ジョンソンの立場から言えば、学問によって世間の称賛を求めることは、学問の目的と名声の何たるかを知らない浅薄な行為である。彼は功名心を「他人の心感嘆でみたし」、「自分では聞くことができない称賛で代々の人々から称えられたいという願望」と定義し、それを「華々しい狂気」、「慢心が焚きつけ、愚があおる炎」(*R. 49. 6, III. 265*)と呼んでいる。しかも、「名声は彗星のごときもので、<sup>いっとき</sup>一時燃え上がれば、あとは永遠に消滅する」(*R. 203. 11, V. 295*)。時代の風雪にたえる、少数の不朽の名前をのぞけば、われわれの心を惹きつけ、話題にされる名前は、流行で新しい寵児が生まれるたびに、すべて忘れ去られてしまう。ジョンソンは人間の称賛などではなく、永遠で不動なものに心をかけるべきである、と教えている。

しばらくは世界を輝きでみたし、やがて消えて忘れられる、流星のような哲学をふらふら追求せず、もしも学問を志す人が、道徳的、宗教的な真理という永遠の輝きにしっかりと目をすえたら、幸福へのもっと確実な道が発見できるであろう。(*R. 180. 13, V. 186*)

たとえ目立たなくても、人の役に立てたというだけで、正直な情け深い人は満足するかもしれない。もっと大きな報酬を求めようとする人は、名声を得るのにあせるのではなく、神慮が定めた義務を果たすことを目指すべきである。(*R. 106. 13, IV. 204*)

ジョンソンが真の知識、真の学問と考えているものを、特定の分野としてとらえることは適切ではない。なぜなら、既述のように、彼の批判は学問そのものを対象としているのではなく、主として研究にたずさわる学者の人間性を対象としているからである。ジョンソンが学問に真偽を見るのは、そのかわり方にある。彼は学問に少なくとも二つの目的があると考

えている。一つは、知識を修めて活用し、社会と人類の幸福に役立てることであり、もう一つは、学問をとおして「汝自身を知る」(R. 24, III. 130-5) ことである。知識をとおして、もしくは知識の反照として、永遠で不動なものを意識し、自分の有限さ、卑小さ、そして死すべき存在であることを知ることである。彼が真の知識、真の学問と考えているものは、実用的な知識のみを指すのではなく、何らかの意味で存在の合理的な認識をもたらし、人間の行為に倫理的な影響を及ぼし得るような知識をも指す。また、人間性批判を中心にするジョンソンの考察にそって言えば、そのような価値をもちえた知識と学問を指す。いずれにしても、ジョンソンが、学問は役立たなければならない、価値をもたなければならないと言うとき、その役立つとは、存在の認識からくる倫理的な効用もふくめた、幅広い意味で使われているのである。

ジョンソンの教えでは、人生は短くて不確かである。しかし、だからといって、焦ったり自棄になったりするのではなく、不確かであるからこそ堅実に生きなければならない。人生を肯定的に在りのままに受容して、人間の一生という大きな視野から仕事をとらえることが大切なのである。人生の儂さからくる内面的な衝迫を、そのまま荒々しい力として解放するのではなく、それを理性的にとらえ直して、生産的な力として高め、粘り強く学問にかかわっていく。学問の意味は、人類の幸福に貢献することであり、人間の真の姿を認識することである。また同時に勤勉を奨励することでもある。永遠なものの前に立てば、自分の卑小さを意識することで、驕ることも、高ぶることも、いたずらな競争心に煽られることもない。したがって絶望することもなく、悠然とわが道を歩むことができる。そして、このたゆみない努力が自己実現へのかけがえのない力となる。ジョンソンは、努力をおしまず、徳をつんで、人類の幸福に貢献できた人こそ、名声に値すると考えている。名声とは「人間が徳に対して授けることができる唯一の報酬」(R. 46. 10, III. 267) なのである。もし学問と倫理が乖離しているとすれば、それは、ジョンソンの目から見れば、学問を真摯に求めている

のではなく、名利に生きているからである。

ジョンソンの考察は、運命論を否定し、偶然の関与を認める立場から出発して、人生の儚さ、精神の特性、時間の認識までもふくむ、力強い思想が脈打っているが、究極的には、永遠の存在を意識した、宗教的な知にもとづくことを知らなければならない。

## Summary

### An Analytical Reconstruction of the Thought of Samuel Johnson

#### — On Learning (2) —

Yoshihiro Ishii

Many of Johnson's precepts contain warning against being blind to the fact that life is short. We 'see and confess' that life is short and uncertain, but we 'act as if life were without end' (Yale, IV. 11). Consequently, we idle away life till not much of it is left. He warns the blindness about time is no small obstacle to achieving a great end of learning.

To use every moment in an effective way, he suggests, is a moral action. If we design an important project in social as well as personal terms, to fail to complete it is 'culpable...for having left a good action in the hands of chance' (IV. 10). So he inculcates the value of industry. But industry may end unrewarded if it is not incited by the consciousness that life is short. He suggests that the life of a man whose work is left unfinished could be as worthless as that of a man who leads an idle life with no remarkable achievement. Accordingly, in order to complete work and make life worthy, we need to know the scale of the work and the amount of time we can spend on it, and 'proportion carefully our labour to our strength' (V. 314).

Certainly, the shortness and uncertainty of life may be the marked message of many of Johnson's precepts. But he is never pessimistic about life. On the contrary, he considers that having 'a dejected indifference of the works of art, and the pleasures of life, because life is uncertain and short' is 'a failure of reason, a morbidness of mind' (*Life*, Oxford, 847). According to him, we 'want not time, but diligence, for great performances' (IV. 211).

In order to examine why he has these different views about life, we need to inquire into his understanding of the natures of the mind and time. As to the key to successful learning, he gives an important insight: 'The chief art of learning...is to attempt but little at a time. The widest excursions of the mind are made by short flights frequently repeated; the most lofty fabricks of science are formed by the continued accumulation of single propositions' (IV. 361). The really creative operation of the mind may not last long. But it needs 'the continued accumulation of single propositions' in advance to make such 'widest excursions of the mind'. By the term of 'diligence' he suggests the whole process of this mental operation, including the time needed for it.

In Johnson's precepts there are always two views of time. One magnifies the value of it in a sort of microscopic perspective. It takes time in the absolute sense and urges him on to industry (the moral action) by giving the keen sense of transience. The other looks at time in broader perspective and makes the worth of it relative, as it were, by comprehending it rationally from the survey of the whole of life. It accepts life affirmatively. These two views may not appear consistent, but they are significantly interrelated with each other. What is worth notice is that the urge coming from his sense of transience is subsumed into the rational and productive view of life, and enables him to live a steady and vigorous life. His remarks about the shortness of life and the need of diligence stem from these two views of time and the nature of the mind.

We also need to examine what effect motion has on the activity of the mind. Johnson makes special precautions against the inertia and the intellectual corruption of the mind (IV. 106-7). They result from the lack of motion and are likely to steal the meaning of life. He accounts of what they may end in: 'the vital powers unexcited by motion, grow gradually languid; as their vigour fails, obstructions are generated; from obstructions produced most of

those pains which wear us away slowly with periodical tortures, and which, though they sometimes suffer life to be long, condemn it to be useless, chain us down to the couch of misery, and mock us with the hopes of death' (IV. 83).

Perhaps, Johnson observes some sort of laws of motion in the working of the mind: the relation of the dynamic and static states. The dynamic state is the activity of the vital powers excited by motion. The static state is the inactivity of them from the lack of motion. The dynamic state is likely to be reduced to the static state when it loses its motion. The law is about the force of inactivity. Interestingly, he seems to give moral meaning to this law, calling one state diligence and the other indolence: 'The lapse to indolence is soft and imperceptible, because it is only a mere cessation of activity; but the return to diligence is difficult, because it implies a change from rest to motion, from privation to reality' (V. 64).

As to indolence Johnson's advice is noteworthy: 'Never...suffer yourself to acquiesce in total vacuity. Encourage in yourself an implacable impatience of doing nothing. He that cannot be idle, and will not be wicked, must be useful and valuable, he must be always improving himself or benefiting others. If you cannot at any particular time reconcile yourself to any thing important, be busy upon trifles. Of trifles the mind grows tired, and turns for its own satisfaction to something better, ...' (Letters, IV, 180)

His moral message is clear. We must act in order to 'be useful and valuable' and improve ourselves and benefit others. Even the external activity through being 'busy upon trifles' helps activate the mind and overcome the force of the 'lapse to idleness'. By diligence he means making the mind active against this force. And he calls this action 'virtue', for in his *Dictionary* he gives it the definitions of 'efficacy', 'power', and 'acting power', along with 'moral goodness'.

From all these discussions we can take a synthetic view of Johnson's thought

on learning. Through learning he advocates the whole and moral personality of scholars. For more efficiency and virtue, they ought to spend some of their time on daily duties, too, rather than be entirely immersed in study, because that better suits the nature of the mind. Naturally the separation of study and duty emerges as his central criticism. And by now industry must be understood to mean not only the application to study, but also the positive involvement with matters of life. Although Johnson does not dwell on this at length in his essays, it is evident from many moral and satirical passages of his writings. His satirical stance, however, provides more questions to review.

Occasionally Johnson gives an impression that he is attacking on the study that deals with useless knowledge and thereby makes no contribution to human happiness. However, we must remember his basic position on the uncertainty about future events (*Life*, Oxford, 368). He knows perfectly well that any seemingly useless knowledge could contribute to human happiness in some form or other. Furthermore, he encourages any small start of learning if they are motivated by good intention (IV. 71-2). The reason why he gives such an impression, then, is because he is largely attacking on scholars' human nature, which allows us to question what their learning is for.

And occasionally he also appears to doubt the merits of learning and industry. He writes, for example: 'No place affords a more striking conviction of the vanity of human hopes, than a public library...' (IV. 200), and 'he that finds his way to reputation, through all these obstructions, must acknowledge that he is indebted to other causes besides his industry, his learning, or his wit' (III. 14). But judging from the lines of the discussion we have followed, it is simply wrong to give that conclusion. He firmly believes in the benefit of learning. But any assessment of an individual achievement is relative and changeable, and therefore as time passes people forget the achievement. What he criticises are the follies and pride of those who are absorbed in study



alone without being concerned for the virtue they must promote. He considers that besides the study they have duties to do, which provide them with no reason to neglect for their uncertain future success.

Lastly we need to define what the true learning is that Johnson bears in mind. It is not appropriate, however, to define what field it belongs to, because his criticism of learning is not actually of learning itself, but of the human nature of scholars who are engaged in it. However, at least he seems to speak of two ends of learning. Learning is to contribute to promoting public as well as personal happiness in a practical way, and to produce rational understanding of human beings, accompanied by moral effects on their action. When he implies true learning, he indicates the usefulness of it. And when he speaks of the usefulness of learning, he indicates not only the practical but also the ethical utility of it. 'Be acquainted with thyself' is his ultimate precept about learning, because the knowledge of ourselves, such as the circumstances we are in, our relationship to others, and the mortality of our being etc., helps quicken virtue. This is one of the central themes of Johnson's literature.